

<活動記録> <教育事業> 2020年度先端社会研究所リサーチコンペ

著者	林 隆敏, 生井 達也, 家高 裕史, 李 軒羽
雑誌名	関西学院大学先端社会研究所紀要
号	18
ページ	109-118
発行年	2021-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029523

■ 活動記録 ■

◆ 教育事業 ◆

2020 年度先端社会研究所リサーチコンペ

【募 集 期 間】：2020 年 5 月 7 日（木）～5 月 15 日（金）

【リサーチコンペウィーク】：2020 年 6 月 1 日（月）～6 月 13 日（土）

【プレゼンテーション審査会】：2020 年 6 月 13 日（土）

【開 催 形 式】：オンライン（Zoom）

◆開催の趣旨／リサーチコンペを振り返って

林 隆敏（先端社会研究所副所長）

2010 年度より毎年開催している先端社会研究所リサーチコンペは、複数の申請課題から研究助成を行うものを選考する競争的事業である。学内の研究科に所属する大学院生もしくは研究員であることを応募資格とし、先端社会研究所が取り組む「大学院教育支援事業」の一環として、全研究科の大学院生・研究員を対象に、本研究所のテーマである「文化的多様性を尊重する社会の構築をめざした、社会調査を基軸とする先端的な研究」を理解し、将来それに貢献することが期待される「優れた先端的な研究」を募集・採択することがリサーチコンペの趣旨である。

申請された課題は、書類審査において①先端性、②親和性、③計画性の三点から審査され、選考を通過したものがプレゼンテーション審査へと進む。プレゼンテーション審査（公開審査）においては審査員より質疑が行われ、採択課題が決定される。今年度の応募は3件であり、採択実績などを加味して審査した結果、プレゼンテーション審査へと進んだのは3件であった。

プレゼンテーション審査（2020 年 6 月 13 日（土）に Zoom を利用してオンラインで開催）では、本研究所のテーマである「文化的多様性を尊重する社会の構築」に資する研究であるかどうか、また、社会調査を基軸とした先端的な研究であるかどうかの評価の中心的なポイントとなった。これらに今後の研究の展望まで含めて慎重に審査を行った結果、プレゼンテーション審査に進んだ3件すべてを採択することが決定された。

以下では、本年度のリサーチコンペで採択された申請課題の概要とそれに対する審査員の講評・意見等について記しておきたい。

社会学研究科研究員の生井達也氏による「生の技法としてのサブカルチャー—長野県松本市のインディー音楽を媒介とするネットワークの事例から」は、サブカルチャーを「趣味」や「娯楽」と位置付ける先行研究を批判的に捉え、そこに携わる人々の実践とネットワークに注目し、サブカルチャー実践を「生の技法」として捉えなおす研究である。審査員からは、古くからローカルな文化交流の場として機能したライブハウスという場所が、新たな文化とネットワークにいかに関わりをもつのかという点で興味深い対象であるものの、ライブハウスから広がるネットワークをどのよう

に記述するのが明確でなく、また研究の質からいっても、客観的なネットワークの広がりよりは、実践者にとっての主観的意味世界の広がりを記述するほうが実り豊かな研究になるのではないかという意見があり、また、ネットワークの範囲の観測、音楽に関心のない地域住民の認識や態度に関わる視点の必要性も指摘された。

社会学研究科博士課程前期課程2年の家高裕史氏による「鉄道システムが地域再生に果たす役割」は、「鉄道廃止」が地域住民の「就業」「買い物」「医療」「教育」へのアクセスにどのような影響を与えてきたのかを解析し、「鉄道という交通機関の社会における役割」を明らかにしようとする研究である。審査員からは、都市交通以外の場で、鉄道がローカルな地域といかに関わるかを検討する点が評価された一方で、計量分析とは別に、現地の状況について質的に理解することや、その理解と定量データの接合に関する周到な計画を期待するという意見や、対象地域を選定した理由並びに説明変数及び目的変数の明確化の必要性を指摘する声が聞かれた。

社会学研究科博士課程後期課程2年の李軒羽氏による「中国における現代説話の伝承動態－湖南省ミャオ族の事例」は、中国湖南省における不思議説話の生成過程を把握することを通して、消費社会の中で再生産される民俗文化の位相と真正性を解明しようとする研究である。審査員からは、「伝承」とその現代における「商品化」、マジョリティによる「内的オリエンタリズム」とマイノリティ自身のオーセンティックなアイデンティティ形成という交差する文脈を結び付ける分析枠組みが評価された一方で、研究期間を考慮し、研究対象または範囲の絞り込みについて検討が必要であり、また、現地調査が叶わなかった場合の代替計画も準備しておくことが望ましいとの指摘がなされた。

以下は、採択課題の研究概要および中間報告である。

◆採択された研究計画書要旨／中間報告

◎生の技法としてのサブカルチャー：

長野県松本市のインディー音楽を媒介とするネットワークの事例から

生井 達也（社会学研究科研究科研究員）

本研究の概要・目的

本研究は、ネオリベリズムが席卷する現在の日本社会で、人々がサブカルチャーの実践を通じて、いかに生きられる場を立ち上げ、それを維持しようとしているのかを検討するものである。現代社会においてサブカルチャーは、資本を生産する「労働」とそれ以外の「非労働」のうち、周辺としての「趣味」や「消費」として後者に位置づけられてきた。一方社会学を中心としたサブカルチャーをめぐる近年の議論では、アートによる「地域づくり」の取組を通じて人々がいかに協働しうなのかや、同人誌活動のような「趣味縁」が公共性や社会参加の第一歩となる可能性を探るものなど、公共政策に役立つ資本としてサブカルチャーを論じる傾向が見られる〔浅野 2011；宮本 2018〕。

しかし筆者には、このことは「ネオリベラリズム社会においては『非労働』的な余暇的な活動までもが、労働＝資本へと収奪される」という A. ネグリと M. ハートの指摘を図らずも裏付けてしまっているように思える〔ネグリ・ハート 2009=2012〕。これまでのサブカルチャーの歴史においても、そこでの流行が資本主義に取り込まれ商品化されることはあったが、2010 年に始まった「クールジャパン」の政策が示しているように、日本のサブカルチャーはネオリベラリズムと癒着した「上からの」グローバル化を推し進める行政府にとって、一層有用な資源と見なされるようになっていく。だが、D. ヘブディジが言うように、サブカルチャーは市場に一方的に取り込まれてきたわけではない。むしろその特徴は、市場にある商品の意味をブリコラージュし、自分たちの社会的アイデンティティを創出する点にこそある〔ヘブディジ 1979=1986〕。そこには、サブカルチャーの実践が支配的なイデオロギーの流用や変容を通して、周辺化された人々が共に「生きられる場」を生成するための契機を含んでいることが示唆されている。

以上の学術的背景を踏まえた本研究の「問い」とは、人々がサブカルチャーを実践することでどのように「自分たちの」意味世界を作り出しているのか、すなわち、サブカルチャーに関わる人々がいかに支配的なイデオロギーや言説に完全に包摂されずに、それをやり繰りしながら共生的な生活世界を紡ぎ出しているのか、ということとなる。そして上記を踏まえた本研究の目的とは、サブカルチャーを媒介とした人々の実践がどのように生きられる場を創造し、またそれが人々のどのような行為実践を通じて維持されているのかを、現地調査を通じてミクロな視点から丁寧に検討することである。

本研究では、具体的な調査対象として、長野県松本市におけるインディー音楽というサブカルチャーを媒介とした人々の実践を取り上げる。松本市はインディー・ミュージシャンたちのあいだで、2010 年代以降のインディー音楽シーンを牽引する日本屈指の拠点として知られている。それを担っているのが、同市の女鳥羽川沿いに密集する、他地域から移住した 20 代から 30 代の人々が経営する小規模ライブハウスやレコード屋、ゲストハウス、カフェ、ギャラリーなどである。店の業種は多岐にわたるものの、それぞれの店で国内外のインディー音楽の演奏や販売が行われている。またスタッフ同士や客として訪れる地元の人々、他都市のミュージシャンといった多くのアクターの間で、一つの店舗を越えた草の根レベルの人間関係が広がっている。このネットワークは、一見すると地方都市の一角に限定された閉鎖的で小規模なものに見えるが、その中心となっているライブハウスは、東京や大阪、浜松などの国内の都市だけでなく、メルボルンのような海外の音楽シーンとも親密な交流があり、多方向に独自のネットワークを構築している。本研究では、参与観察と聞き取り調査を用いて、このようにローカルにもグローバルにも縦横無尽に広がる草の根レベルのネットワークがいかに形成されてきたのかを追うことで、サブカルチャーを媒介とする生きられる場の諸相を明らかにすることを目指す。

中間報告

報告者は 2020 年 9 月 3 日から 6 日にかけて長野県松本市で現地調査を行った。主には、ライブスペース兼バー A での参与観察および店主である N 氏への聞き取り調査、レコード店 B の店主である R 氏への聞き取り調査、ゲストハウス C の「女将」S 氏とスタッフ I 氏への聞き取り調

査、クラブスペース D での参与観察、音楽スタジオ兼ライブスペース、カフェ E の店主 J 氏への聞き取り調査を行った。聞き取り調査では、各インフォーマントに松本市内での主観的なネットワークの拡がりについて主観的な「ネットワーク図」を作成してもらい、そうしたネットワークがどのようにつながっていったのか、どのような関係性なのかなどについて説明を行ってもらった。

今回の調査において見えてきたのは、「界限」というフォークタームの重要性和音楽実践者と個人経営者の関係の重なり、そしてそれらを基盤とした連続性をもった人びとの「生活」の在り方である。

まず「界限」についてであるが、松本市内のサブカルチャーを媒介としたネットワークにおいて、ライブハウスやカフェ、クラブなどそれぞれの場を中心にコミュニティや小集団のようなものが形成されインフォーマントたちはそれらを「界限」と呼んでいることであった。それらの「界限」は、閉鎖性もありつつも常にメンバーが入れ替わるような流動性を持ち、排他性と開放性を持ち合わせているという。そのような流動性によってそれらの「界限」同士の境界は曖昧であり、「界限」同士が重なりあう形で松本のサブカルチャーがもつ独自のローカリティが作り出されていることがわかった。

次に、音楽実践者と個人経営者の関係の重なりについては、現地の音楽実践者の中に個人経営で店を持つものが多く、経営、生活と音楽実践が深く関与していることが今回の調査から見出された発見であった。そのような音楽実践者が経営者でもあることにより、同様の形態を持つ店同士の交流が生まれ、各店舗でのお互いの演奏なども可能になっているようである。またそのような音楽実践と店の経営のつながりは、労働／余暇、客／友人、店／家などの境界を曖昧化していると思われる。音楽とは関係のない場でもこうしたネットワークを介した交流が行われており、サブカルチャーが連続した全体性である「生活」の基盤となっていると言えるような状況が作られていた。

以上が今回までの調査で浮かび上がってきた点である。今後の調査では、松本市街のこれまでの変遷についても把握していく予定である。具体的には、松本市文書館や松本市立図書館や図書館で市史や街づくりに関する資料を収集し、松本市のローカリティの在り方を明らかにし、それが現在のサブカルチャーを媒介とするネットワークとどのように関係しているのかを検討していきたい。

【参考文献】

浅野智彦, 2011, 『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店.

Hardt, Michael and Antonio Negri, 2009, *Commonwealth*, The Belknap Press of Harvard University Press. (=2012, 幾島幸子・古賀洋子訳, 水島一憲監訳, 『コモンウェルス——〈帝国〉を超える革命論』(上)(下) NHK 出版協会.)

Hebdige, Dick, 1979, *Subculture*, London: Routledge. (=1986, 山口淑子訳, 『サブカルチャー——スタイルの意味するもの』未来社.)

宮本結佳, 2018, 『アートと地域づくりの社会学——直島・大島・越後妻有にみる記憶と創造』昭和堂.

◎鉄道システムが地域再生産に果たす役割

家高 裕史（社会学研究科）

1. はじめに

報告者は、2020 年度関西学院大学先端社会研究所リサーチコンペにおいて研究助成を獲得し、2021 年 3 月まで当該助成金を用いて研究を行う予定である。報告者はこれまでの研究において、野村（2019）が示したような、「どこに住むどのような集団が、その交通を使ってどこへ行くのか」という視点から現代社会における鉄道の役割を考察してきたが、その一環として、福岡県嘉飯山地域の鉄道廃線と沿線高校への通学者数の統計データをもとに以下のことを明らかにしてきた。

- ① 通学手段たる鉄道路線を失った高校は、当初、鉄道で通学する距離にある近隣自治体からの通学者が大幅に減少する。
- ② その後は、交通の便が悪く、地元以外的高校に通いにくいにもかかわらず、地元自治体内からの通学者も減少し、場合によっては廃校に至る。
- ③ 交通の便が悪く地元所高校もない、つまり高校への通学がしにくい自治体は高校生年代とその親世代である 40 代・50 代の人口減少が著しい。
- ④ 地元自治体内に高校はなくとも、交通の便がよく、その他自治体内の高校への通学が容易であれば、高校生年代、その親年代の急速な人口減は見られない。

以上のことから、通学手段である鉄道路線は高校の地位そのものに少なからず影響を及ぼし、地域における高校生年代人口と、生産人口であるその親年代の人口の流出を防ぐための教育資源の保全という意味で大きな使命を担っているであろうことが示唆された。

2. 現在の研究状況

「はじめに」で述べたように、少なくとも福岡県嘉飯山地域の高校通学においては、鉄道は重要な資源であると言えるが、そもそも鉄道は社会の中でどのように利用されてきたのか、そしてそれはどのように変化してきたのか、社会構造や産業構造の変化から、今一度検証することをリサーチコンペ採択後の 3 か月間の目標とした。ゆえに、この期間は、文献研究を通し、ポスト工業的空間の広がる社会における鉄道の役割について考察してきた。

1970 年代から今日まで、多くの地方の鉄道は経営の危機に立たされ、廃止されていく路線も多い。これらの背景には、過疎化やモータリゼーションの進展による乗客減少があることは間違いないが、それに加えて、Lash & Urry（1994=2018）の示すように、同時期に「先進国」と呼ばれた国のほぼすべてで製造業の雇用者数の減少、すなわちポスト工業化が進展したことも、鉄道の行く末に大きな影響を与えていると言える。

そもそも、鉄道の多くは原料や中間生産物などの製造業関連の物品を輸送することを目的に敷設されており、近代産業（すなわち第二次産業）との関係性を抜きで語ることはできない。日本社会のポスト工業化の進展は鉄道にも多大な影響を及ぼし、「原料、製品、労働者を輸送」するシステ

ムから「消費のために人を輸送」するシステムへの転換が求められている。

それでは、ここでいう消費の対象は何だろうか。それは、都市周辺の町や村の住民にとっては、都市内の優れた消費者サービス（百貨店など）が該当するが、その一方、都市内の住民は周辺部をどのように消費するのか。Lash & Urry（1994=2018）においては、専らツーリズムがその例として挙げられている。ツーリズムは、大都市内の住民が、その周辺部の消費者サービスを楽しむものに他ならない。鉄道はそのための輸送手段の1つとして、ポスト工業的空間で生き残ることになっていくと主張されている。

加えて、非日常的消費である観光に対して、日常的な都市と周辺部の関係について論じようとするれば、それは郊外住宅地の成立を語ることを意味する。高度成長期以降1990年代までの日本において、「人口のドーナツ化現象」と言われたように、都市から郊外への人口流出が続いたが、これは都市周辺部の町や村が都市住民に郊外住宅地として消費されたと言えるのだろうか。これについて検証するために、まず「郊外」の定義について考えたい。若林幹夫ら（2000）の中で、若林は「郊外」の定義を、「近郊」との区別の上で以下のように述べている。「近郊」とは、「（都市周辺で）仕事も職ももともとその場所にあるような地域社会」「都市周辺の農村のような自立性が高い社会」（若林ら 2000：26）である。

一方、「郊外」とは、「都市との関係において、都市で生活したり仕事したり活動したりする人たちが住むための場所」「住むための機能が都市の外側に外化した場所」（若林ら 2000：26）である。その上で、若林は交通機関と郊外の成立の関係性の説明を行っている。

近代になって都市がさらにどんどん都市化していく。都市ではない場所が都市になるのではなくて、都市がどんどん巨大に変化していった、その外側を都市領域に取り込んでいく。そのスピードがものすごく早まって、規模も大きくなります。（若林ら 2000：47）

郊外が成立していく媒介的な存在として、鉄道や路面電車や自動車をあげました。近代社会を特徴づけることはいくつもありますが、大きなことの一つでありながらあまり多くの論が重視していないことの一つは、「速度」です。近代は、大きな速度を内蔵することによって、いままでも存在しなかった時間と空間のスケールやペースやパターンを持つことができるようになった社会なのです。（若林ら 2000：47）

このように、鉄道は、近代産業における生産活動のための輸送と並行して、都市－郊外間の労働力の輸送を担うことになる。それは労働者の住む範囲を以前ではありえない広さに広げ、都市近郊の町や村が都市郊外として組み込まれるという結果をもたらした。つまり、労働する場所＝「職の空間」の集合体である都市に対して、「住の空間」を提供する場所として、都市住民ひいては都市全体に消費される場所としての郊外が成立し、鉄道をはじめとする交通機関がその過程で媒介としての機能を果たしたと言える。

それでは逆に、郊外に住み着いた人々が、都市の消費者サービスを享受するために鉄道を利用したかと言うと、それは必ずしもそうとは言いきれない。郊外に住むことのメリットの1つとして、

自家用車を所有しやすいことがある。そうすると、例えば買い物にしてもクルマで郊外型店舗へというのが一般的になり、都市中心部の百貨店は衰退した。すなわち、自家用車の普及は高度消費者サービスの場としての都市の存在を曖昧にしたのである。それは、渋滞の少ない地方において顕著となり、鉄道は消費活動のための媒介としての機能を縮小させていき、経営の苦しさから廃止となる例も相次いだ。

しかしながら、報告者がこれまでの研究で明らかにしたように、高校通学という意味合いでは地方であっても鉄道は大きな役割を担い続けており、鉄道廃止によって高校そのものの地位低下が進んだと考えられる事例もある。松岡（2019）によれば、日本は高校段階での学校間格差が大きい。それゆえ、どこの高校に進学するかは人生において大きな岐路の1つである。地理的・距離的に通学可能な範囲に自身の能力や資質にふさわしい高校があるか否かは、その地域に住む中学生やその親にとって重大な関心事であることは確かであろう。

3. 今後の課題

最後に、これまで主な研究対象としてきた福岡県嘉飯山地域は旧産炭地であるため、社会のポスト工業化の影響を最も大きく受けてきた地域の1つであるが、同じ福岡県内だけでもさまざまな産業構造や歴史的経緯を持つ地域が存在し、それぞれの場所で鉄道や地域とのかかわりはまた違ったものがあるだろう。1つ例にとれば、私鉄の西日本鉄道（以下、西鉄）沿線では1970年代から西鉄主導の住宅開発が行われ（西日本鉄道株式会社 1978）、福岡市にも近い春日市、大野城市、筑紫野市といったあたりには、福岡市中心部への西鉄電車による通勤がパッケージされた住宅地が多い。また筑後地方の中心都市久留米市、嘉飯山と同じ旧産炭地でありながら西鉄主導の開発が行われた大牟田市のような場所では、また違った地域交通事情が存在するはずである。

このように背景の異なる地域を網羅するために、詳細な現地調査並びに統計データの解析を行っていきたい。

参考文献

- Lash, Scott & Urry, John, 1994, *Economies of Signs and Space*, London: Sage Publications. (安達智史監訳, 中西眞知子・清水一彦・川崎賢一・藤間公太・笹島秀晃・鳥越信吾訳, 2018, 『フローと再帰性の社会学－記号と空間の経済－』晃洋書房.)
- 松岡亮二, 2019, 『教育格差－階層・地域・学歴』筑摩書房.
- 西日本鉄道株式会社, 1978, 『創立 70 周年記念 西日本鉄道 70 年史』西日本鉄道株式会社.
- 野村実, 2019, 『クルマ社会の地域公共交通－多様なアクターの参画によるモビリティの確保の方策－』晃洋書房.
- 若林幹夫・三浦展・山田昌弘・内田隆三, 2000, 『「郊外」と現代社会』青弓社.

◎中国における現代説話の伝承動態

－湖南省ミャオ族の事例－

李 軒羽（社会学研究科）

・研究計画要旨

中国湘西地方（湖南省西部）には、少数民族ミャオ族の民俗宗教を題材にした世間話が数多く存在する。中でも、「趕屍」（客死した湘西出身者を歩かせるという呪術を使ってその遺体を故郷まで運んで戻ること）、「蠱毒」（虫を使って他人に害を与えたり不幸をもたらしたりするための呪術）、「落洞」（美女の魂を奪って嫁にする洞窟の神に関する伝承）をめぐる語りが特に盛んである。20世紀後半以来、中国大陸及び香港のホラー作品がこれらを要素として取り入れ始めたことによって、語りが中国全国に広まり、湘西地方またはミャオ族を代表するイメージとして定着している。しかし、このような語りを扱う論文や著作はわずかに存在するものの、その形成と展開、現代社会における商品化などの現状については、まだ十分に調査されていない。

本研究では、こうした事例を「湘西怪異説話」と名づけた上で、歴史文献や先行研究の整理、現地調査に基づいて分析したい。そして、「少数民族地域における不思議説話の生成過程」を把握することを通して、消費社会の中で再生産される民俗文化の位相と真正性を解明することを目的とする。

・中間報告

まず、「湘西怪異説話」について扱った中国語の先行研究の検討を行い、「趕屍」の全体像を把握した。

中国の文化人類学者陸群（陸 2006）によると、明・清時代以来、民間で編纂された稗史や説話集によってはじめて趕屍が記録され、清朝中後期になって記述における主なパターン－顔が見えない死者の行列とそれを率いるシャーマン－が形成されたという。しかも、常にミャオ族などの特定の民族と結びつけて展開したというわけでもなく、むしろ一つの地域文化として当時の文献に定着したらしい。また、湘西地方といっても、必ずしも湖南省西部ばかりでなく、現在の江西省、貴州省、広西チワン族自治区に相当する地域（湖南省の周辺地域）の一部も、時々趕屍の舞台として現れる。20世紀半ば以来、技術革新、経済発展、政府側による迷信の排除などの社会変動によって、遺体運搬の一方法としての趕屍とこれに関する語りがだんだんと消えていった。一方で、大規模な観光開発が行われるとともに、趕屍を含む「湘西怪異説話」のコンテンツ化が始まり、特に湘西地方の「伝統文化」として宣伝され、舞台化が図られた趕屍には、ミャオ族のグルメ、民族衣装などとともに、地域の特徴を引き出す役割が与えられた。

これ以外に、ジャーナリスト梁波、作家李苑（梁・李 2006）が収集した世間話や大衆文化の事例にみる「趕屍像」の流布の背景には、20世紀後半期における香港ホラー映画の繁栄があるという観点も興味深い。文献調査で報告者が調べた限りでは、「僵屍（キョンシー）」という死体妖怪を物語る「僵屍映画」は、香港ホラー映画の一ジャンルとして絶大な人気を誇っており、中でも僵屍を趕屍と結びつけてストーリーを展開する作品が極めて多い。1980年代以降、俳優にミャオ族の

民族衣装を着させ、僵屍・趕屍をも意図的に取り上げて両者の関係を強調する作品もいくつか登場してきている。実のところ、趕屍と同様に、明・清時代以来の説話集には僵屍の話も散見される。硬直した身体で跳ねるその姿は、湘西地方のシャーマンによって操られる死者を連想させやすい。これらの理由から、一部の先行研究では、明・清時代における僵屍説話の流行と趕屍伝承との関係について指摘もなされている（呉 1993；劉 2008）。

これまで述べてきたように、趕屍伝承の歴史的成立過程、ツーリズムとの関係、映画における表象については、2020年10月に日本民俗学会第72回年会（オンライン開催）にて、「死人を操る呪術－中国湖南省ミャオ族の「趕屍」説話をめぐって－」と題し発表を行った。ただし、映画、小説、テレビ番組、SNS上の投稿といった膨大なメディア・コンテンツが織りなす複雑なネットワークにおいて、趕屍の表象が果たしてどのように生産（再生産）され、どのように消費されているのか、また、湘西地方の人々と湘西地方以外の人々は、こうした表象をどのように受け止めているのかについては、さらなる検討を進める必要がある。

同じく「湘西怪異説話」に属する蠱毒に関しては、陸などの中国人研究者だけでなく、国際的にも広く注目されている。たとえば、ミャオ族研究を中心としたアメリカの学術雑誌“Hmong Studies Journal”にて、“Gu (poison)”（蠱毒の英語名）に関する論文が数本発表されており、近年でも、日本の民俗学者川野明正（川野 2005）、医学者村上文崇（村上 2017）による研究が代表的な成果としてあげられる。また、蠱毒という部分的なものから、「憑き物」全体へ視野を広げようとした学術著作も少なくない。陸、川野による考察を参考にして蠱毒の性質を述べると、元来、蠱毒は漢民族、非漢民族に拘らず分布している伝承だが、漢民族社会から排除されることによって衰退の一途をたどった。だが、ミャオ族を含む中国西南部の少数民族社会においてこれが残されており、稗史や説話集によって記録され、明・清時代になって少数民族と結びつけて語られるようになった。西南少数民族にとって、蠱毒はネガティブな出来事（病気、死亡、不幸など）を説明するための民俗知であると同時に、近世の漢族文人が記した蠱毒伝承には、漢族の進出によって少数民族との間に生じた矛盾や対立も反映されている。現代では、蠱毒も趕屍と同様に映画などで取り上げられ、大衆文化の一部へと変容してきている。

日常生活で起こる出来事を説明するためのもう一つの民俗知は落洞である。洞窟群に棲む神「洞神」は美女を奪う単なるいたずら好きな神というだけではない。洞神を祀る方法によって、個人または村落の運命も常に変化するとよくいわれる。ただし、膨大な量に上る蠱毒の先行研究と違い、落洞に関する論文や著書は非常に少ないのが現状である。管見の限りでは、陸群『湘西落洞』（陸 2006）と楊慧など（楊・王 2009；楊・周 2010；楊 2010, 2012）による4本の論文しか見当たらない。前者では事例紹介の内容がほとんどであるのに対して、楊は文学理論を用いてテキスト分析を行い、さらにAT分類（フィンランドの民俗学者アールネにより編纂され、アメリカの民俗学者トンプソンにより改訂された、世界各地に伝わる昔話をその類型ごとに収集・分類した索引）を参考にして落洞伝承に関する昔話、伝説を類型化するという研究視角を提示した。しかしながら、日常生活の中で実践される落洞に主眼を置いた上での宗教社会学的視角からの分析を行ったり、地域のシャーマニズムとの関わりについて述べたりした研究はいまだに存在しない。さらに、女性が中心となって展開してきた蠱毒、落洞をめぐる語りを、ジェンダーの視角からも検討する余地がある

ように思われる。

今後の展望として、引き続き文献調査を行うほか、新型コロナウイルスの感染拡大状況に応じた適切かつ有効な調査方法（または代替案）、大衆文化における「湘西怪異説話」の表象と受容を把握するためのアンケート調査（インターネット上で実施する）について検討している。

参考文献

- 川野明正, 2005, 『中国の〈憑きもの〉－華南地方の蠱毒と呪術的伝承』風響社.
- 梁波・李苑, 2006, 『趕屍－不僅僅是伝説』作家出版社.
- 劉天賜, 2008, 『僵屍與吸血鬼』三聯書店（香港）有限公司.
- 陸群, 2006, 『湘西趕屍』民族出版社.
- 陸群, 2006, 『湘西巫蠱』民族出版社.
- 陸群, 2006, 『湘西落洞』民族出版社.
- 村上文崇, 2017, 『中国最凶の呪い－蠱毒』彩図社.
- 呉昊, 1993, 『香港電影民俗學』次文化有限公司.
- 楊慧・王偉, 2009, 「湘西洞神伝説研究」『重慶科技学院学報（社会科学版）』2009(1): 174-175.
- 楊慧・周彩雲, 2010, 「湘西洞神伝説叙事模式研究」『懷化学院学報』2010(1): 10-13.
- 楊慧, 2010, 「湘西洞神伝説文本研究」『重慶科技学院学報（社会科学版）』2010(8): 78-80.
- 楊慧, 2012, 「湘西洞神伝説文化制衡作用研究」『銅仁学院学報』2012(1): 73-76.